

松尾恒子編『母と子の心理療法』

困難な時代を生きた子どもたちをどう癒し育むか』

(創元社・二〇〇三年五月)

高石 恭子



本書は、甲南大学で四〇年にわたって教育研究活動に携わり、今日の本学における臨床心理学領域の発展の礎を築いた松尾恒子教授のご退職を記念して編まれた論文集である。松尾先生(堅苦しい呼称はたぶん好

まれないので、以下このように呼ばせていただく)は、大学というアカデミズムの場で、心理学と言えば行動主義、実証主義が席卷していた時代に、未来を見通す目をもち、母子の愛着関係に注目した心理療法の実践を行ってこられた先駆者である。その鋭い直観力、本質を捉える力と、既成の枠組みに捕らわれない自由さは、先生を身近に知っている者ならだれしも敬服するところであろう。ただ、直観の人であるだけに寡筆でもあり、先生の切り開いてこられた研究の世界とその軌跡を、広く知らせる機会がないことを残念に思っていた。

今回、本書が刊行され、その貴重な機会の一つを得て嬉し

く思う。本書とほぼ同時に、学術フロンティア研究事業の成果として刊行された『現代人と母性』(松尾・高石編 新曜社)が、先生の母子医療分野との学際的な研究をまとめた集大成であるのに対し、本書はより先生独自の母子臨床の世界を反映した内容になっている。執筆者は松尾先生をはじめ、甲南大学で仕事を共にされてきた中井久夫、森茂起、羽下大信、横山博、上村くにこ、木村晴子の諸氏と筆者(高石)、かつての同僚である岡田康伸氏、および松尾先生の教え子で現在はそれぞれの臨床現場で活躍している、番匠明美、田中隆志、岡田由美子、友久茂子の諸氏である。巻頭には、恩師として河合隼雄氏の一文も寄せられている。

「第一部・母性 その光と影」では、まず松尾先生の研究の軌跡が述べられるとともに、それぞれの執筆者の関心領域に基づき、児童虐待を防止するという観点からの「甘え」と「しつけ」論考、母親元型をめぐる考察、古代史から図像的に分析した母親論、前近代以降の子育ての文化史、チャイルドラインの報告など、奥深い母性と子どもについての論考が続く。「第二部・事例にみる母と子の心理療法」では、大学付属の相談室、学生相談室、病院小児科の心理室、児童相談所など、さまざまな現場における母子の心理療法の実践が紹介される。なかには、白血病等を抱え、病棟で死に近い世界を生きた子どもの箱庭療法事例など、ふだん触れる機会のあまりない貴重な資料も提示されている。

論文とコラム形式の小論が交互に配置されているが、いずれも読み応えのある、迫力ある内容になっている。各章の切

り口はさまざまでも、通底して流れているのは、松尾先生から受け継ぎ、あるいは共有する、母性のもつ癒しの力への信頼と言えるだろうか。これから心理臨床の研鑽を積んで現場へ出ていこうとされている学徒のみなさんや、すでに現場に出て日々挑戦しておられる臨床家の方々に、是非じっくり読んでいただきたいと思う。

また、最後に付記しておく、本書を手に取る楽しみは装丁にもある。本書のカバーは、松尾先生のご希望で、わが国でも著名な版画家の山本容子さんの作品を使わせていただいで作成したもので、とても美しいデザインになっている。時間的都合もあり、新たに制作していただくことはかなわなかったが、既作品から“everyday everywhere”と題された大作を選んだ。装丁も芸術作品であり、バーコードは印刷しないという主義を貫いている人としても、山本さんは知られていない。そういうわけで、本書は一冊ずつ手作業でバーコード・シールをカバーに貼るという出版社のお骨折しも加わって完成した。外側から是非味わっていただきたい書である。

(たかいし きょうこ・臨床心理学)